

高等学校日语专业教材系列



# 实用中国語翻訳教程

■ 主 编 王宣琦  
■ 副主编 曾 丹



WUHAN UNIVERSITY PRESS

武汉大学出版社

高等学校日语专业教材系列

# 实用中国語翻訳教程

■ 主 编 王宣琦  
■ 副主编 曾 丹



WUHAN UNIVERSITY PRESS  
武汉大学出版社

## 图书在版编目(CIP)数据

实用中国语翻译教程/王宣琦主编;曾丹副主编. —武汉:武汉大学出版社,2009.7

高等学校日语专业教材系列

ISBN 978-7-307-07034-9

I. 实… II. ①王… ②曾… III. 日语—翻译—高等学校—教材  
IV. H365.9

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2009)第 078258 号

责任编辑:叶玲利 王春阁 责任校对:刘欣 版式设计:马佳

---

出版发行:武汉大学出版社 (430072 武昌 珞珈山)

(电子邮件: cbs22@whu.edu.cn 网址: www.wdp.com.cn)

印刷:通山金地印务有限公司

开本: 720 × 1000 1/16 印张: 24.5 字数: 367 千字

版次: 2009 年 7 月第 1 版 2009 年 7 月第 1 次印刷

ISBN 978-7-307-07034-9/H · 655 定价: 31.00 元

---

版权所有,不得翻印;凡购我社的图书,如有缺页、倒页、脱页等质量问题,请与当地图书销售部门联系调换。

## 前　　書

中日両国間の各分野にわたる交流が高まるに連れて、言語上におけるコミュニケーションの伝達も日増しに盛んになっており、これからももっと高いステージレベルの上で展開されていくと同時に、民間の間で広がっている「草の根」のような交流パターンは、切っても切れないものになっていくだろう。このような時代の流れの中で、言語転換の重要性がますます多くの人々に認識されつつある。よく「言葉は人間関係の中で大切な架け橋である」といわれるが、翻訳・通訳の仕事はまさにこのような一本の架け橋のようなものである。

教育現場の最前線に立ってきた編集者は、中日両国間の交流において欠かせない大切な一環たる翻訳、つまり中国語の日本語訳こそ、中国の日本語学習者のもっとも弱い所の一つだと痛感している。本書は、先達たちの貴重な研究成果を踏まえ、その基本的な理論をもとに、主として中国語から日本語への翻訳に関する各部分にわたる説明、とりわけ充実した実用例（応用篇）を通し、中国人としての日本語学習者にとって、役に立てるようなものをまとめ、編纂したものである。本書最大の特徴は、これまで国内で編纂された同類の教科書と違い、すべての解釈、説明に日本語を用いたことである。もちろん、学習者にとって、ある程度難しさが増したことは言うまでもないが、同じように編集者の私たちにとっても、これは一つの新たな試みであり、並々ならぬチャレンジでもある。その上、本書で採用した翻訳例の短文ないし各種類の文章もなるべく最新の内容を取り扱うよう心がけた。学習者の皆さんには、有効なブラッシュアップに役立てられるように活用していただきたいのである。

本書の基本的構造は、まず中国語の日本語訳の理論的な概説から始まり、そ



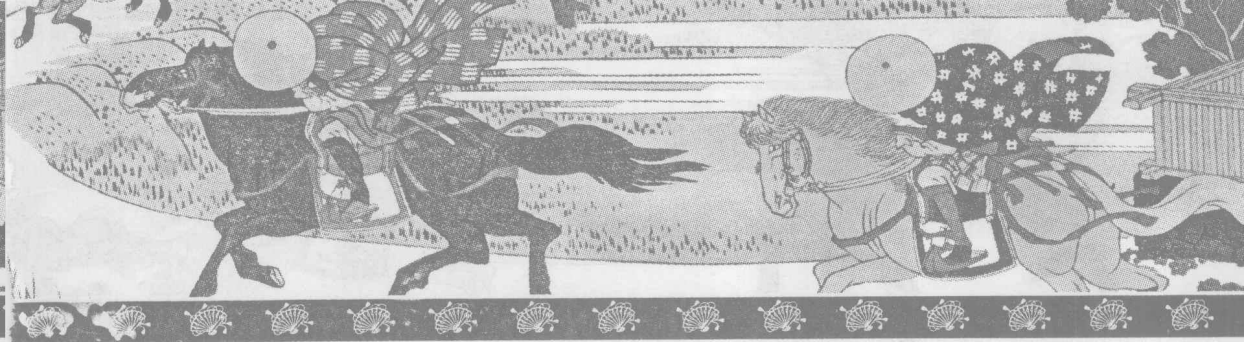
れから翻訳に関するよく取り上げられるいわゆる技法についての解説を、例を挙げながら述べる。そして、語レベルの翻訳、各種類のセンテンスの翻訳と様々な文体の文章の翻訳を実例を通して、その翻訳の方法を説明する。当教材は、六章三十一節からなっている。あらかじめお断りしておくが、本書は翻訳のいろいろなテクニックよりも夥しい量の実例と対照訳に、編集方針の重点を置いている。したがって、各章の説明部分の「応用篇」において、たくさんの実例を挙げたと同時に、さらに「練習問題」を設置し、豊富で様々な文体の翻訳課題を用意した。学習者の皆さんに充実かつ実用的な翻訳応用例を提供しようとするものである。その狙いは言わなくてもご理解できると思うが、これらの実例をまじめに吟味し、推敲し、さらに自ら翻訳作業を試みることは、必ず中国語翻訳のレベルアップにつながると信じているからである。

また今回、《實用中国語翻訳教程》を編纂するにあたって、本学の招きで日本語学部にて教鞭をとっておられる堀咲子先生から原稿の日本語表現及び内容の適切さについて、丹念なご修正をしていただき、心より感謝の言葉を表わす次第である。本稿が上梓するに当たって、武漢大学出版社のベテラン編集者の王春閣先生、葉玲利先生及び関係者のかたがたより多大なご協力をいただき、ここに謹んで感謝の意を表したいと思う。また、本稿の編纂段階で武漢大学外国语学院日本語学部の一部大学院生及び本科生の許海濱、胡方方、董編、韓芳などの学生諸君に文字入力のご協力をいただき、合わせて感謝の気持ちを表する。

なお、本稿の編纂にあたって、私たちが自ら訳したものを用例として用いたほか、さらに諸先達方の著書の翻訳実例を本書の用例として許可なく使用したことを、心からお詫びすると同時に、衷心より感謝の言葉を表わす次第である。

編集者：王宣琦 曾 丹

2009年4月27日



# 目 次

## 前書 / 1

## 第一章 概論 / 1

第一節 翻訳の基準と作業のプロセス / 1

第二節 翻訳者としての基本的な条件 / 5

第三節 翻訳者の情報源 / 7

第四節 辞書と翻訳 / 8

練習問題 / 10

## 第二章 翻訳に関する必要なテクニック / 14

第一節 順訳と倒訳 / 15

第二節 分解訳と合訳 / 22

第三節 意訳と変訳 / 23

第四節 加訳と簡訳及び減訳 / 31

第五節 数量詞を訳す場合の注意点 / 39

応用篇 / 45

練習問題 / 51

## 第三章 語彙の翻訳 / 56

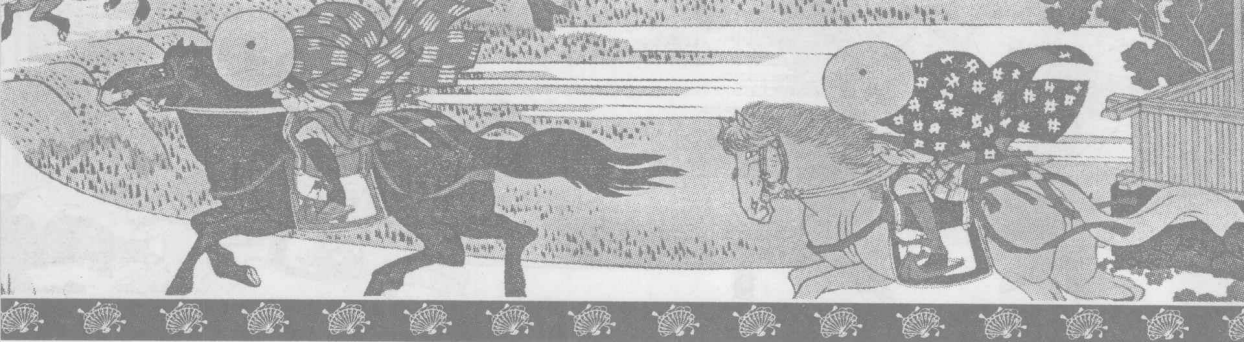
第一節 中日語彙面の異同 / 56

第二節 漢字熟語の訳 / 59

第三節 外来語の対応 / 64

第四節 多義語の翻訳 / 67

応用篇 / 71



練習問題 / 79

第五節 成語・諺・おしゃれ言葉の翻訳 / 82

第六節 擬音・擬態語の翻訳 / 90

第七節 敬語・位相語の翻訳 / 96

第八節 特有名詞などの翻訳 / 98

応用篇 / 101

練習問題 / 122

#### 第四章 センテンスの翻訳 / 126

第一節 連動文・兼語文の翻訳 / 126

第二節 緊縮文の翻訳 / 130

第三節 様々なパターンの複文の翻訳 / 135

第四節 会話文の翻訳 / 157

第五節 可能・使役・受身など各種

センテンスの翻訳 / 159

応用篇 / 169

練習問題 / 182

#### 第五章 文章の翻訳 / 187

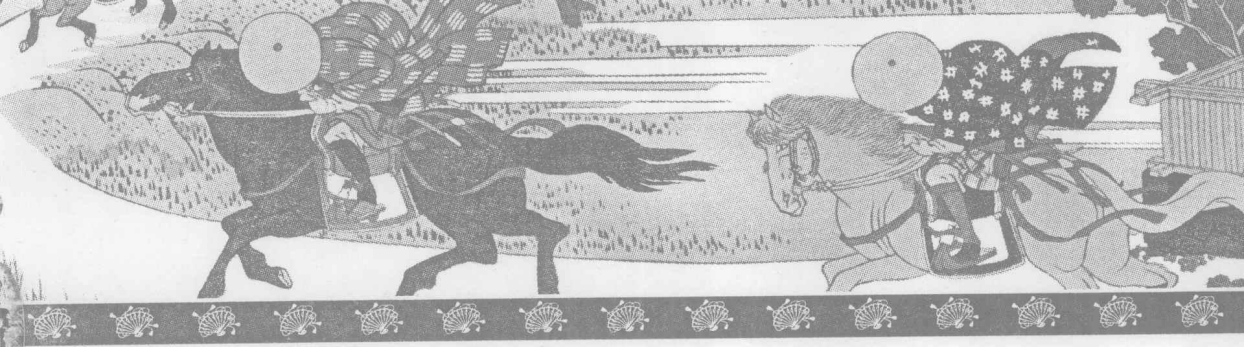
第一節 文章の内容と文体 / 187

第二節 評論文・雑文などの翻訳 / 188

第三節 文学作品などの翻訳 / 221

第四節 各種広告・公用文・書類の翻訳 / 239

第五節 式典挨拶文の翻訳 / 251



第六節 漢詩の日本語訳 / 260

応用篇 / 272

練習問題 / 286

第六章 通訳に関して / 293

第一節 通訳の種類と形態 / 294

第二節 通訳の基礎練習 / 296

第三節 通訳者としての心構え / 299

応用篇 / 303

練習問題 / 338

付録一 練習問題の参考解答例 / 344

付録二 参考資料 / 382



# 第一章 概 論

翻訳は、一つの言語内容を他の言語によって表出する過程または結果であり、異なる言語の間においてコミュニケーションを行う言語活動である。これはもはや翻訳に携わっている人たちの共通の認識になっている。

われわれが普通よく言う翻訳とは、つまり違う国の言語の間における言語転換の活動であり、即ちある国の言語内容を他の国の言語に再現することである。前者は原文と言い、後者は訳文と言う。翻訳は訳者によって母国語と外国語との間の言語転換のほか、外国語と外国語との間の言語転換もおこなう。このようなコミュニケーション活動は、大きく言えば国と国の間における政治・文化・経済・スポーツ・民間交流など各分野にわたって行われているが、その主役が翻訳者や通訳者であると言えるだろう。これから、翻訳という学科の一般技法と各種の語彙・文体について実例を挙げながら論じていこう。

## 第一節 翻訳の基準と作業のプロセス

一つの学科として、翻訳はそれ自身の系統性、完全性と科学性を持っている。言うまでもなく、翻訳にもその学科としての内々的な基準があるはずである。何がその基準であるかと言うと、今までの研究を見れば分かるように、つまり大体二通りの認識があるのである。それはずばりといえば「意識」と「直訳」の技法である。「意識」とは、すなわち原作の意味をよく捕らえた上で、自己流にその全体の意味をおおざっぱに目的語に訳していくのに対して、



「直訳」とは、文字通りに原作の構文、用語などの成分をほとんどストレートに他の言語に転換していくのである。このような翻訳法に対してこれまで様々な論争が引き起こされてきたが、実際、意識にしろ直訳にしろ、どちらも純粋な「意識」或いは「直訳」はありえないと言えるだろう。

20世紀の初め、中国近代における有名な思想家、教育者、また翻訳者であった嚴復氏（1853～1921）は、翻訳の基準は「信・達・雅」であると指摘した。この考え方はこれまでの中国の翻訳界において幅広く認められている。

「信」とは“忠实准确地表达原意”（原文に忠実な翻訳をすること。）、即ち「原作に従い、正しく間違いのない訳をすること」；「達」とは“通顺流畅地译出原文”（原文の意に達して、原作の意味を滑らかに表現すること。）；「雅」とは“灵活运用修辞法，使译文要达到文辞优美的效果”（修辞法を巧みに生かして、優雅な訳文を作ること。）という意味である。

周知のとおり、この言葉は1901年嚴復の翻訳で出版された『天演論』の序文に記されている。『天演論』は、嚴復の訳書として紹介されていることが多いのだが、正確に言うと、トマス・ハクスリー著の『進化と倫理』を一部削り、翻訳し、所々に訳者（嚴復）自身の意見を入れたものである。以下にその一部を紹介しておこう。

译事三难信达雅。求其信已大难矣。故信矣不达。虽译犹不译也。则达尚焉。……译文取明深义。故词句之间，时有所颠倒附益，不斤斤于字比句次，而意义则不肯奔问。题曰达旨，不云笔译，取便发挥，实非正法，……

これを日本語に訳すと――、

翻訳という仕事には難しいことが三つある。つまり内容が誠実で信用でき、字句が優雅であるということだ。また、内容が誠実で信用できる――つまり正確ということだけでもかなり難しいことであるが、正確でも言葉が滑らかでなければ、それは翻訳とは言えず、翻訳していないのと同じである。したがって、言葉の滑らかさを重視しなければならない。

訳出する言葉は、その意図するところを深く読み、はっきり述べることに重



点を置く。したがって語句を逆にしたり、増やしたりし、語句や構文の語順にこだわり過ぎないようにすれば、訳出した意味はオリジナルと食い違うことがないのである。翻訳と言わず、主旨を表わすと称するのは詳細な論述を展開するのに都合がよいからであるが、これは正しい方法ではない。

以上の翻訳基準に達することがいかに難しいかを、この解釈によってよく理解できるだろう。

さて、「信・達・雅」という翻訳の基準に基づいて、本格的に作業の段階に入るのだが、しかし、この翻訳の作業をどのようにスムーズに進めていけば適切なのかという問題も出てくる。

普通、翻訳の仕事を引き受けてから、まず最初に原作の内容を初めから最後まで徹底的に読んでおき、読んでいるうちに原作の表出しようとする中心なる主旨をしっかりと捕らえる。それから翻訳の作業に取り組むべきである。全文の訳文を仕上げてから、あらためて原作と訳文を初めから対照しながら手入れしていくのである。

世の中には様々な分野の文章が存在している。しかし翻訳者がそのすべての文章を読んですぐに理解できるわけがない。翻訳者をオールマイティな通訳装置だと誤解している人がいる。しかし残念ながらあらゆる分野においてオールマイティな翻訳者などいるはずはない。世の中のすべての訳本は、翻訳者のあらゆる知恵をしぼってようやく出来上がったのだと言えるだろう。そして、個人の理解の差によって、または言葉遣いの習慣などの違いによってどんな文章の翻訳も、まったく変わらない一定の決まりがあるわけではないと考える。「信・達・雅」という翻訳基準の下で、その文を使用言語の読者に理解してもらえさえすれば、その訳本が悪いとか下手だとか言い切ることはできないだろう。これはあくまで筆者個人の私見であり、参考までにあえてここに述べておきたい。

つい最近ネット上で、中国読者（特に若者）の中でもよく知られている林少華氏のブログを拝見させていただいたが、氏の翻訳によって、中国で広く読まれている村上春樹の『ノルウェイの森』の二段の訳文を取り上げて、「日本



文学美化論」ならびに自分の翻訳体験を読者に紹介されていた。ここではこの二段の原文と訳文を照らし合わせながらみておこう。

- (1) それから彼女は僕の方を向き、にっこりと笑い、少し首をかしげ、話しかけ、僕の目をのぞきこむ。まるで澄んだ泉の底をちらりとよぎる小さな魚の影を探し求めるみたいに。

(林少華氏の訳): 随之, 她朝我转过脸, 甜甜地一笑, 微微地歪头, 轻轻地启齿, 定定地看着我的双眼, 仿佛在一泓清澈的泉水里寻觅稍纵即逝的小鱼的行踪。

確かに美しい訳文である。原文の意味を間違いなく伝えただけでなく、中国人読者にとっても分かりやすく、まるで中国語の小説を読んでいるような思いにさせられる。“朝我转过脸, 甜甜地一笑, 微微地歪头, 轻轻地启齿, 定定地看着我的双眼”という一連の静かな動作の描写は実に見事な訳である。“仿佛在一泓清澈的泉水里寻觅稍纵即逝的小鱼的行踪”という訳文も普通の翻訳者なら絶対に考えつかないような芸術的翻訳だといっても過言ではない。

- (2)僕は顔を上げて北海の上空に浮かんだ暗い雲を眺め、自分がこれまでの人生の過程で失ってきた多くのもののことを考えた。失われた時間、死にあるいは去っていった人々、もう戻ることのない思い。…僕はずっとあの草原の中にいた。僕は草の匂いをかぎ、肌に風を感じ、鳥の声を聴いた。それは一九六九年の秋で、僕はもうすぐ二十歳になろうとしていた。

(林少華氏の訳): 我扬起脸, 望着北海上空阴沉沉的云层, 浮想联翩。我想起自己在过去的人生旅途中失却的许多东西——蹉跎的岁月, 死去或离去的人们, 无可追回的懊悔。……而我, 仿佛依然置身于那片草地之中, 呼吸着草的芬芳, 感受着风的轻柔, 谛听着鸟的鸣啭。那是一九六九年的秋天, 我快满二十岁的时候。

“浮想联翩”、“蹉跎的岁月”、“无可追回的懊悔”、“草的芬芳”、“风的轻柔”などの語句は、原文にはそのような文字的表現がみられない。これは訳者が全体の文脈をキャッチした上で、修辞学の原則にしたがい、とりわけ訳者の文学ないし文化教養によって、練り上げた訳語である。



このような修飾性の強い語句があつてこそ、文学作品なのである。確かに美しい文字である。しかし、何かを美化することは決してしていないのである。

二段の訳とも訳者の中国語と日本語の水準はもとより、両言語への理解が決して普通のものではないことがよく分かる。氏は自らこう語っている。「訳文からも見られるように、ぼくの訳は、ずいぶん手を入れたもので、こういう意味では私が日本文学を美化する傾向があると言えば、私はこの美化論を受け入れるしかない」。間違いなく、訳者が頭を絞って訳したものは読者に読ませるものである。きれいな文でなければ、他人に笑われるばかりでなく、自分の苦勞は何の意味もないのである。少なくとも筆者自身は林少華氏の高雅な訳に頭を下げるのである。

## 第二節 翻訳者としての基本的な条件

別に他人のことをバカにする気は毛頭ないが、一応外国語を身につけた人が誰も立派な翻訳者或いは通訳者になりたがるものだが、しかし残念なことに、そう簡単になれるわけではない。何故ならば、それはやはりそのような人材になるには、かなり厳しい条件を必要とするからなのである。「ローマは一日にしてならず」と言われるように、長年腕を磨いておかなければ一人前の翻訳または通訳者にはなれないのである。

一般的に言って、翻訳の仕事に従事するには、次のような条件がどうしても必要である。

- (1) 翻訳者として鋭い観察力と鋭敏な触覚を持たなければならない。グローバル化に従い、国際間の交流はますます盛んになってくる。お互いに理解を深めるには各分野にわたる情報交換が重視されつつある。世の中にはほぼ毎日のように様々なジャンルの出版物が出されているが、翻訳者は常に新しい出版情報をキャッチして、その夥しい数の作品から外国の読者に紹介するに値するものを選出しなければならない。
- (2) 翻訳者としては、母国語についての自分のレベルを常に高めることが極



めて重要である。そうでなければ、原作の内容や風格、裏に潜んだ持ち味を正確に深く把握することができず、訳文の良し悪しに大きく影響するからである。しかしながら、現実是非常に厳しい状態である。90年代以降、電話、携帯、パソコンなどの電子製品の普及につれて、人々はこれらの便利な電子器具を用いて、人と人との交流を行うのがごく普通のこととなったのである。一方これらの電子製品が人々に便利を与えたと同時に、弊害をもたらしたのも免れない。最も心配させられることは、人々の文字の使用頻度が低められ、言語低下の現象が目立つようになったことである。今国内で外国語を専攻として勉強している大学生の中で、かなりの学生は中国語の表現力と理解力が信じられないほど低いのである。無論、このような人はもしがんばらなければ、立派な翻訳者になることなどとても期待できない。

- (3) 豊かな知識と生活体験を有することも、翻訳者にとって必要不可欠な条件である。翻訳の対象となる内容は、実に森羅万象で、あらゆる分野、すべてのジャンルにわたっている。この点はほかの課目や専攻とかなり異なるところで、狭くて深い知識よりも、広くて豊かな知識が要求される。例えば、文学作品を日本語に翻訳する場合、表出する訳文の言語は考えられないほど広いものとなる。時空関係、共通語と方言、老若男女と職業別を問わず、多種多様な言語表現が登場する。翻訳者が、それらの日本語の表現をうまく使うことができなければ、当然良い訳文は望めない。また、科学技術の発展が日進月歩に発達している今日においては、翻訳者もそれらの専門的な科学技術の知識をかなり深く要求されるのである。
- (4) 翻訳に関する論理的な知識は翻訳者の勉強にとっても必要だと筆者は思う。一つの学科としての翻訳に、それ自身の理論と法則があるし、またいろいろと具体的なテクニックやノウハウがある。本書では後ほどそれらの理論と法則及びテクニックとノウハウに関して、簡略的に紹介しておく。

ところが、「自分はそんな堅苦しいものなんか勉強したことがないけれども、ちゃんと翻訳をやっている」と言う人もいるに違いない。確か、筆者自身も授業を通して翻訳の理論などを勉強したり教えたりしたにも



かわらず、実際に翻訳の作業に取り組む場合いちいちそれらのテクニックやノウハウなどを頭に浮かべながら翻訳することは、まずないのである。ここに矛盾が出てくるのだが、つまり翻訳に関する論理など勉強しなくてもいいのではないかということである。

いずれにしても、何かの外国語を一応勉強して、それで通訳の仕事にチャレンジする気になる。その勇氣は高く評価するが、現実の世界ではそのような考えはあまりにも甘えすぎていると指摘しなければならない。一人前の翻訳者になるには厳しい訓練を行わなければ、それはただの夢だと言わざるを得ない。

### 第三節 翻訳者の情報源

科学技術が目まぐるしいほど発展している現代社会においては、いかなる情報の収集も可能になり、必要ならば何でも手に入れられるのである。だから、このようなすばらしい環境に恵まれ、現職の翻訳者或いは通訳になりたい有志者はある意味で極めて幸せであると言えるのではないか。

立派な翻訳者になるため、的確な情報を即時に手に入れておかなければならない。情報過剰の今日では、翻訳者は常にいろいろな手段を用いて、自分の仕事にふさわしい情報を確保すべきである。通常、翻訳者の良く利用する情報源は、大別して次のようなものがある。(1) マスメディア。具体的にいうと、テレビ、放送、新聞、雑誌などがそれである。これは、たぶん多くの学生が、無理だと感じるかも知れない。何故かといえば、受信から録音・録画までをこなすのはかなり難しいからである。確かにそのとおりだが、しかしやってみなければ分からない。(2) 中日両国でそれぞれ開発されたインターネットの関連ウェブサイトや検索エンジン、特に中国と関係のある情報を求める。これも探す気があればいくらでもそれと関連する情報が見つけれられるはずである。(3) 入手できる日本語版のテレビドラマやアニメなど、その字幕をなるべく見ないで自分で心の中で訳してみる。(4) 書物、辞書、事典などの類である。今、多くの若者が本型の辞書ではなく電子辞書を受用しているが、プロの日本語勉強者なら、必要な辞書を数種類購入しておいたほうが適当だといえる。



大雑把な紹介ではあるが、これらの情報源をうまく利用すれば、あなたの翻訳の作業は、大いにはかどるに違いない。

もう一つ述べておきたいのであるが、それは現在中国国内の日本語教材は、一昔前よりかなりの量が増え、最新の日本語文章を載せた各種類の教材は、翻訳者の練習或いは参考になる最もいい材料の一つであろうということである。時間をうまく利用してそれらの教材の練習問題を自らやってみることもすばらしいレッスンだと思う。その気さえあれば、自分の仕事にプラスになるものがたくさん求められるのである。

## 第四節 辞書と翻訳

最近、ある若い教師から「今は電子辞書があって本当に便利ですね」と言われた。別に悪いことではないが、どうも違うような気がする。確かに電子辞書は小さくて、便利で、携帯しやすい利点があることは筆者もよく知っている。しかし、電子辞書の欠点もまた明らかである。例えば、電子辞書には『大辞林』、『広辞苑』など日本人にもよく使われている辞書も収納されている。しかし、電子辞書に収められているのは単なる文字だけで、実際の辞書には挿絵（鳥、魚、動物、花、建築、着物）などもあるし、付録の中に「色とその言い方」などもついている。これらのものは電子辞書には収納されていない。本型の辞書の中では小学館から出版された『現代国語例解辞典』が、これまで使った辞書の中で最も使いやすい一冊である。一番役に立つのは類義表現の比較表である。だから、電子辞書は電子辞書としての便利さがあるのは否定できないが、必要な場合にほかの辞書も利用して、適切な訳語を見つけるべきである。

翻訳はいつも語の環境（語境）に伴うものである。語境とはつまり原作に現れた作品の実際内容であり、普通よくいう「文脈」のことでもある。訳者としてはそれを十分に理解した上で、それを訳文に訳すべきである。場合によっては原文の語境は不完全なものであったり、意味が十分に読み取れないものがあつたりするものも見られるが、その場合、文の前後関係「語境」を十分



に捉えて、不十分な部分或いは文の裏に潜んでいるものを、補充して絶対的な語境に近づくようにさせてから訳すべきものである。だから、訳者はいつも語境の存在を意識して、そして語境が意味を決定することを忘れてはならない。簡単に言えば翻訳の要点は、即ち常に語境と結びつけて訳語を選出することである。しかし、いろいろな邪魔があるからそれはあまり容易なことではない。

辞書はわれわれ翻訳者の武器のような存在であるから、それを収集すると同時に、うまく利用することも重要である。辞書はそれぞれの編纂傾向が違うから、利用する場合適切な物を選んで使うのは利口なやり方である。そうはいうものの、翻訳者は訳文作成の場合いちいち辞書の語彙の説明と訳語を辛抱強く読まず、文脈の理解もしないうちに疎かに訳語を選んでしまうケースが多いのである。実は辞書の邪魔がその一つである。辞書の解釈どおりに訳文を書いたらおかしい文になることは割と多い。辞書の解釈は、その語の基本的意味に対しての概説とまとめであり、異なる語境においての語の意味の引き伸ばし(引申)、転用、変化とかかれる言葉の決まりに対していちいち説明することはない。そして、辞書の解釈はその語の意味を説明するものだけで、訳文にイコールにはならない。例えば、最も誤訳の多いところは、往々にして中日両言語にある多義語や同形類義語の訳である。具体的例をあげてみることにしよう。

【例1】 夜里下班时，我的挎包被两个年轻人给抢走了。

(訳文): 夜中、仕事の帰り道にハンドバッグが二人の若者に奪われてしまった。

一見して、これはうまい訳ではないかと思われる人がいるかもしれないが、問題は中国語の“抢”を日本語の「奪う」に訳したのはふさわしくないということだ。日本語の「奪う」は、辞書で調べてみれば確か「他人の所有するものを無理に取り上げて自分のものにする。力づくで他人のものを自分のものにする。」などの意味説明が載っている。しかし、一瞬のうちに他人の物を力づくで自分のものにする言葉は、ほかに「奪い取る」と「ひったくる」もある。特に他人の不備のところで物を奪い取る場合は、「ひったくる」を使うのが普通である。そういうわけでこの短文の日本語訳は「…ハンドバッグがひったくられた(奪い取られた)」と訳すべきである。